



大本山永平寺

お授戒

永平寺では毎年四月二十三日から二十九日まで授戒会が勤められます。お釈迦さまに由来し、歴代の祖師がたが受け継いでこられた「戒」を禅師さまより受ける尊い法儀です。

「戒」を受けるとは、端的に申せば「揺るぎない宗教生活の基盤を整える」ことです。つまりお釈迦さま、歴代祖師の生活基盤、思考様式に自己を結びつけ、さらに「仏と絆を結ぶ」ということになります。

参加者の皆さまには一週間、

法堂で修行を勤めていただきませう。仏さまの行いという標準に我が行いを重ね合わせて修していく。だから「修行」というのです。「衆生仏戒を受くればすなわち諸仏の位に入る、位大覚に同じゅうし終わる、誠にこれ諸仏の御子なり」。

仏さまの御子を誕生させるのが授戒会です。

読者の皆さまにもご参加をお勧めします。詳しくは、永平寺尚事寮までお問い合わせください。



尚事寮

電話

FAX

〇七七六―六三一―三二二三二

〇七七六―六三一―三四九三



大本山總持寺

四月は報恩大授戒会じゆかいえの月です。毎年十日から十六日の七日間、百名を超える戒弟かいていが修行をし、お釈迦さまから脈々と禅師さまに伝わった戒法を授かります。

今年も戒を授ける戒師さまは貫首の大道晃仙こうせん禅師ですが、実は今年が最後のおつとめとなります。禅師さまは、この授戒をもつて退董たいとう（退任）なされます。大道禅師さまは、平成十四年十月十七日に御本山に上山され、八年半にわたって大本山總持寺貫首の大任をおつとめなさいました。とてもお優しいご性格で、

誰に対しても、にこやかに合掌なさるお姿が、私どもの心を常に和やかにしてくれました。退董なされても、いつまでもお元気でいられることを切に願っております。

退董式が終わって、翌日は、新貫首である江川辰三しんげんけい猊下の晋山式しんとなります。新禅師さまは、御本山の監院かんいん、副貫首を歴任なされ、この度貫首の大任を担われることとなります。大本山總持寺は新禅師さまを先頭に、御移転百年の記念の年を力強く歩んでいくこととなります。



昨年の報恩大授戒会

曹洞伴壇

選・村松五灰子

句ふごと成人の日の会釈かな

大阪府 柏原 才子

評 あの娘さんの成人式に望む暗着姿は、もう立派な大人の女性であり、その新鮮な色香の驚きを「句うごと」と表現したところにこの句の華やかさがあり暖かさがある。

遠伊吹はや暮れかかる蓮根掘り

岐阜県 金子 嘉幸

評 蓮根掘りは冬場に収穫。今はよほどが機械掘だが、手で掘っておられるのかも。日も短いこの時期。伊吹山は暮色、それにせかされる作業は大変。薄墨の大景のなか、人の動く映像が見える。

夜神楽や天宇受売の顔光る

福岡県 林 栄行

自販機そののみ照らす霜夜かな

宮城県 木村とみ子

転びしがもふスケートに慣れし子よ

山口県 糸山 栄子

みちのくの風のかたちの凍豆腐

千葉県 吉田 ツル

鯨の腹累々として糶つゝく

三重県 山下 利夫

警策の五感を奔る去年今年

神奈川県 小野沢邦彦

大根焚き火の番薪を椅子として

山口県 福田 澄雄

着膨れて己をゆるす齡かな

秋田県 鈴木ゑい子

軽トラの焼芋屋台取り逃がす

愛知県 小久保左門

紅梅の色香に焦がれ三十路旅

長崎県 小玉愛美理

*選者吟

お土産は花に浮かれし物ばかり

五灰子

*作句小見

お花見の頃。吉野の桜、近くの公園の桜、中にはご自宅の一本だけの桜など色々。楽しみ方も様々。「花」も桜。「桜」は具体的に桜そのものを言いますが「花」は桜にかかわるふくらみがあり一句の題材の広がりもまた楽しみみです。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

加齢とはこんなに寂しいものなのか月を支える冬木のように 鳥取県 峰地 三義

評 「こんなに寂しい」と詠いながら、それを象徴的に表現した「月を支える冬木」が、さびしさだけを表していないところに惹かれた。この美しい詩的な表現には年を重ねて来たことへのかすかな矜持が疼いている。

永らへて卒寿迎ふる齢とは吾が身のこと
といまだ覚えぬ 石川県 前田とよ子

評 卒寿を迎えた人の感慨が率直に詠われていて、そうなのだろうなああと心から思えた。坦々とした措辞に言い尽くせぬ滋味を感じる人がある年齢に達する際の普遍的な思いでもあらう。

国興しの雷鳴がこれほど待たれる正月はない

東京都 鈴木 正作
鉄塔にのぼりて電線を引く人の声響くなり雪の峠に
福島県 大槻 弘

足痛め蒔きそびれぬし菜の種を小春日和を賜りて蒔く

岐阜県 後藤 進

初春のはるか彼方の海境に大型船のシルエツト見ゆ

宮城県 畠山 恵

わだなかへ神酒うち注ぎ磯開けの桶新しき稽古海女をり

秋田県 小田篤恭葉

いま引きし辞書の旁を忘れたりまたも開きて見る拡大鏡に

岩手県 池田 眸

赤飯を炊いて祝いし仔牛まで埋めらるる悲話疫病無惨

大分県 今石 百平

ジャンプ傘のリフォーム帽子持ちて出づ時雨来そな空を見

三重県 野呂 志

上げて
釣り糸のもつれをほぐしいし夫のほぐし終えればみかんをむ

山口県 浜田 道子

きぬ
月光のあまねく屋根に耀ひて庭の池面に山茶花のかけ

山口県 中井 清子

*選者詠

やさしさのふつと兆せるとき
の四隅ひかりて届く
ハガキ
ちづ

*作歌小見

鈴木正作さんの作品の字足らずの破調には国を憂える切迫感があり、音数合わせをして多言を弄するよりもずっと力強く訴えて来るものがあります。「ない」と口語で納めた点も効果的です。ただ他力を頼むのではなくの思いは切ですが。